

美術の窓(97)

美術史家と実技家の共同作業

大和文華館館長 水田 徹

もう10年も昔、大英博物館所在のバルテノン神殿フリーズ彫彫りを調査したときのことである。この種の調査としては異例だが、メンバーに美術史家4名の他に、画家と彫刻家各1名にも加わってもらった。彼らの実技家としての眼力、様式判断力に期待してのことである。調査は限られた時間内で300体もの浮彫像を観察するので見落としを避けるため、浮彫りされた神々や人間像の部位毎に分担を決め、各自が一斉に担当部位の図像と様式を観察し、ノートを取り、ホテルに帰って結果を集計するという方法を採用した。

果たせるかな画家と彫刻家の観察は精緻を極めた。むしろ実技家である彼らには美術史家ほど予備知識はない。結果、筋肉を象るタイプの鎧を身につけた像に「この青年の裸体は彫りが鈍重」といった微笑ましいコメントがつけられることになる。が、逆に言えば彼らは大理石の彫りだけから、裸体か着衣像かの判別がつけられるということである。体の部位すらわからないバルテノン彫刻の大理石断片がアテネ考古博物館の倉庫に山

積みされていると聞く。それらを彫りひとつで裸像の断片か着衣像のそれかを言い当てることができれば、それは今後のバルテノン研究にとって大きな戦力となろう。

ともかく実技家の目は鋭かった。「眼から鱗」式の発見を次々と知らされて茫然自失。微妙な様式判定に迫られると「君ちよっと見てよ」と実技家の応援を頼む回数が次第に増え、母屋を取られた心境にもなる。そもそも美術史という学問は実技家にしかできないのであろうか。あるいは様式判断は実技家にまかせ、美術史家はいわゆる図像解釈や文献調査に徹すべきなのか。

この難題に関し次のようなことを体験したことがある。大学での最終講義の日、私は講義とは別に自作の水彩画を初めて展覧して見せた。それまでは自分が学生時代に絵を描いていたことも、十数年前からその大学仲間とグループ展を開いていることも学生には全く内緒にしておいた。最大の理由は美術史を研究するには絵が描けなきゃ駄目だ、と学生に誤解されるのを恐れたからである。

しかし思い切って催した最終講義記念展は、絵の出来・不出来はさておき思わぬことを私に気付かせてくれた。「形は堅いね」とか「構図は右寄りが多いね」とかいう学生たちの評言は、私のバルテノン観察に反省材料を与えてくれるような気がしたのである。絵を描く描かないに関係なく、美術史家の様式判断にはどうしても個人の眼力なり感覚なりが反映する。であるとすれば、絵を描く美術史家は自らの絵をむしろ積極的に公にし、その形体なり色なりに対する感覚を予め知っておいてもらうことが、当人の様式判定をより正確に評価してもらう一助になるのではないかと、というわけである。作風を見分け、作者を判別することは絵を描くことと同様に決して生易しい作業ではない。ある美術史家の様式判断の適否を問うには、当人の鑑識眼の質や癖まで遡って知る必要があると思われるのである。

話は逸れてしまったが、この調査での実技家と美術史家のコラボレーションの一例をご紹介します。図1はバルテノン北フリーズの一場面、犠牲獣を牽く3人の青年を刻んだ石板である。石板左辺は損傷激しく、特に左端の青年の上半身は破損前の17世紀に画家カレーが描いた素描(図2)に頼るほかない。止むなく欠失部を想定復原することとし、その作図を先述の画家の教え子である女子学生、つまり実技家に依頼した。

数日後その学生が飛んできて「先

生、左端にもう一頭、4頭目の羊が居たんじゃないですか！」とあって差し出したのが図3である。彼女によれば右から3頭目の羊の前脚の右奥にわずかに覗くもう一本の脚先をこの4頭目の羊の前脚と考え、他の羊の前脚から鼻先までの寸法を援用すると、この4頭目の羊の鼻先が石板左辺ぎりぎりに収まるというのである。但し、と彼女は続ける。その手前には左端の青年の衣の残欠が迫るから(カレーはその部分を破損扱いにして描いていない)、4頭目の羊は頭だけを青年の胸の陰から覗かせていた筈である。従って仮にこの青年が腕を下ろした姿なら、羊の頭、少なくともその眼は青年の腕に隠れてしまう。だからこの青年はカレーが描いた通り、右腕を高く掲げた姿になっている、というわけである。

バルテノン・フリーズに刻まれた人物や動物はどんな小さな動作・仕草も必ずそれなりの意味を持つ。そんな中でこの青年の右腕を上げる仕草だけは解釈がつかず、カレーの写し違いではないかとささ言われてきたが、これでその謎が解けたといえよう。原作を実作者の立場を踏まえて誠実に観察し、作者と同じ目線で作品を解釈すること、それが美術史研究の基本であることを、実技家との共同作業を通じて改めて思い知った次第である。因みにこの復原案は嬉しいことに今日では世界の大方の学者に受け入れられている。

図1 バルテノン北フリーズ第4石板



図2 同、カレーの素描

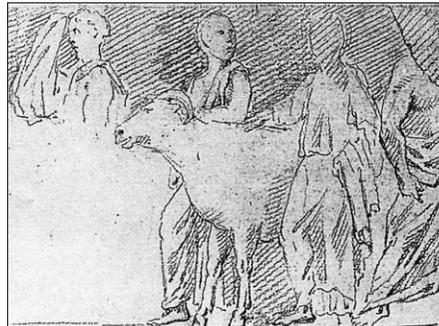


図3 同、復原案(作画:馬場伸子)

